

# 脊の低いとがった男

小川未明

青空文庫



太郎たろうが叔母おばさんから、買かつてもらつた小刀こがたなは、それは、よく切きれるのでした。あまり形かたは、大きおおくはなかつたけれど、どんなふとぼうふとぼう太ちい棒からでもすこし力ちからをいれれば、おもしろいように切きれるのでした。

太郎たろうは、いままで持もつていた小刀こがたなを捨すててしまいました。その小刀こがたなは、いくらといでもよく切きれなかつたのです。太郎たろうには、よくとぐことができなかつたのにもよりますけれど、もとから、その小刀こがたなは、よく切きれなかつたのでした。紙かみを切きるにも、ひっかかるようであつたり、また鉛筆えんぴつを削けずるにもガリガリ音おとがして、よく切きれないのでありました。

それにくらべると、こんどの小刀は、ひじょうによく切れたのです。紙を切るのにも、ほとんど音がしなければ、また鉛筆を削るのにもサクリサクリと切れて、それは、おもしろかつたのであります。

そんないい小刀を持つことのできた太郎は、幸福でありました。いつも、鉛筆の先は、木の香がするようきれいに削られていて気持ちよかったです。太郎は、かばんの中へ、その小刀を失わないように大事にしまって、やがて、学校の終わった鐘が鳴ると、いつものように、急いで、我が家の方へ帰ってきました。

途中で、太郎は、桑園の間を通つたのであります。この道

は、毎日まいにちとお通らなければならぬ道みちでしたが、このときは、ただ太ただ郎らう一人でありましたから、右みぎを見たり、左ひだりを見たりして、道草みちくさをくつてやつてきました。

すると、一本ほん、桑くわの枝えだが目めにはいりました。もし、この枝えだを根ねもとのところから切きつたら、じつにいいつえが造つくられたからです。また、つえなどを造つくらなくとも、その根ねもととはじつに太ふとく、そして枝えだは、おもしろく曲まがりくねっていて、見みるばかりでも好奇こうき心こころをそそらせるようなものでした。

「あの枝えだがほしいな。」と、いつて、太郎たろうは、ぼんやりとたたずんで見みていました。ふと彼かれは、自分じぶんのかばんの中に、切きれる小刀こたながはいっていたことを思い出だしたのであります。

太郎は、にっこりとしました。あの小刀で切りさえすれば、どんな枝でも切ることができると思つたからです、彼は、カバンの中なかから小刀こがたなを出だそうとしました。そして、だれか、見てはいないかと、あたりを見まわしました。もし、百姓ひやくしやうが、見つけたなら、きつと走はしつてきてしかるからであります……。太郎は、うしろを振り向むいたときに、びつくりしました。なぜなら、そこには、脊せいの低ひくい、頭あたまのとがった男おとこが青い顔かおをして立たつていたからです。

太郎は、桑くわの枝えだを切きるどころであります。急に、歩あるき出だしますと、その男おとこも太郎たろうについて歩あるいてきました。

太郎は、気味きみが悪わるくなりましたが、だいたんに振り向むきました。

そしてこの見なれない男を見ると、かえって、小さな男のほうが、びくびくしているらしかったのです。このようすを見て、太郎は、急に、気が強くなりました。

「俺は、切れるナイフを持つているのだぞ！」といわぬばかりに、かばんの中から、小刀を取り出しました。

男の顔は、ますます青くなりました。太郎は、この不具者は、いったい何者だろうと考えましたから、

「おまえは、だれだ！」と、太郎は、男に向かっています。

男は、うらめしそうな顔をして、太郎を見ました。

「坊ちゃんは、私をお忘れなされたのですか？」といいました。

太郎は、こんな男を知っているはずがないと思いました。

「僕は、おまえなんか知<sup>し</sup>っていない。きっと人違<sup>ひとちが</sup>いだろう……」  
と、太郎<sup>たろう</sup>は答<sup>こた</sup>えました。

「あなたは、私<sup>わたし</sup>をよく知<sup>し</sup>っていないさるはずです。私<sup>わたし</sup>こそ、ほかに、知<sup>し</sup>っている人<sup>ひと</sup>はないのであります。私<sup>わたし</sup>は、工場<sup>こうじようまち</sup>町<sup>うま</sup>で生まれました。そして、どうかしんせつな方<sup>かた</sup>のところへゆきたいものだ。

そうすれば、私<sup>わたし</sup>は、その方<sup>かた</sup>のために、朝<sup>あさ</sup>晩<sup>ばん</sup>、どんなにでも働<sup>はたら</sup>こうと思<sup>おも</sup>っていました。……それが、こんな有<sup>あ</sup>り様<sup>さま</sup>になつてしまつた。これというの<sup>わたし</sup>も私<sup>わたし</sup>の不<sup>ふうん</sup>運<sup>ん</sup>です……。」と、青<sup>あお</sup>い顔<sup>かお</sup>をした、脊<sup>せい</sup>の低<sup>ひく</sup>い男<sup>おとこ</sup>はいいました。

「僕は、そんなことは知<sup>し</sup>らないよ。だいいち、おまえのいつていることが、僕<sup>ぼく</sup>には、わ<sup>ぼく</sup>から<sup>ぼく</sup>ないのだ。なんだか、僕<sup>ぼく</sup>が、おまえを



いじめたようにとれるじゃないか？」

「そうです。私は、坊ちゃんに、罪のないのにいじめられました。もつと、役にたち、もつとこの世の中に生きていたかつたのを、あなたは、私をかわいそうとも思わずに、苦しめぬいて捨ててしまわれました。考えると、うらめしいのであります……。」

太郎は、なんだか、この青い男のそばにいるのが怖ろしくなつて、駈け出しました。

その晩のことであります。太郎は、床についてから、昼間学校の帰りに、出あった、脊の低い青い顔の男のことを思い出しました。けれど、すぐに、彼は、眠ってしまいました。

「坊ちゃん、昼間は、なんで逃げ出してしまったのです。あなた

は、あんなに切れるナイフを持っておいでなさるくせに……。し  
 かし、このまえのナイフのほうで、どれほど、思いやりや、友  
 情があつたかしれません。私は、いま窓の下で、横たわりなが  
 ら、そう思っています……。」と、青い顔の男は、いいました。  
 太郎は、身動きをしました。その瞬間に夢からさめたので  
 した。

あくる日の朝、彼は、起きるとまず、机の抽斗を開けて、友  
 情のあつたという昔のナイフを出してみました。そのナイフ  
 は、もう赤くさびています。彼は、念のために窓の下へいつてみ  
 ました。そしてなにか、そこにないかとあたりを探しますと、自  
 分、おもしろ半分、分にその頭を削った、短くなって捨てた一本

の鉛筆<sup>えんぴつ</sup>が、かなしそうに落ち<sup>お</sup>ていたのであります。

——七月九日——



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

※表題は底本では、「脊《せ》の低《ひく》いどがった男《おとこ》」となっています。

※初出時の表題は「脊の低い尖った男」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年5月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 脊の低いとがった男

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>